



◆今号の内容◆

- ・ 巻頭言: CODEに育てられて…
- ・ CODE10周年シンポジウムを振り返る
- ・ 東日本大震災被災地視察
- ・ クローズアップ 「大学生被災地へ行く」
- ・ 救援プロジェクト進捗状況
- ・ イベント案内
- ・ 役員・スタッフ活動記録
- ・ 会員・寄付者紹介
- ・ 賛助会員募集・ご寄付のお願い

CODE Letter

2013.4.23 VOL.46

(特活)CODE海外災害援助市民センター 発行
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL: 078-578-7744 FAX: 078-574-0702
E-mail: info@code-jp.org
URL: <http://www.code-jp.org/>
郵便振替: 00930-0-330579

事務局長就任によせて

「CODEに育てられて…」

気がつくと災害と長い付き合いになっている。18年前、故郷の福岡から阪神・淡路大震災の被災地にボランティアとして来た。当時、ボランティアセンターではなく、とにかく自分たちで被災地を歩いて、出会った人、物事にその場で対応していった。ガレキの片づけ、炊き出し、足湯、歌、祭りなど。少人数で些細なお手伝いしかできなかったが、その分、ひとつの場に何度も通い、じっくりと被災者の人々と付き合う事ができた。

1996年頃、村井雅清前事務局長を福岡にお呼びして講演会を催した際、村井氏が「最大の防災は顔の見えるつながりや！」と語った言葉は今もしっかり覚えている。

その後、CODEに本格的に関わるようになって9年になるが、同じように海外の被災地で同じように被災者と顔を見ながら支援活動を行っている自分がある事に気づく。

当初は、CODEの理念も何も知らずにただ被災地に飛びこんでいた。村井氏は何の指示もせずに、僕らを自由に動かしてくれた。そこには大いなる信頼と挑戦があったのだろう。そしてきっと被災地が人を育てるという事をわかって現場へと派遣してくれたのだろう。その通りに被災地、被災者に沢山の事を教えてもらった。被災する事、人間の優しさ、強さ、逞しさや自然、風土への愛着、人と自然が如何に折り合いをつけていくかなどを、時には背中で、時には身をもって教えてくれた気がする。

4年ほどアジアの国々を旅した事がある。そこで出会った人々は、初めて会った見ず知らずの外国人の旅人

にとっても人懐っこく、優しく接してくれた。仲良くなるともっとその人、その国の事が知りたくなる。そして、その仲良くなったひとりの人を通してその国の状況が徐々に見えてくる。そこで一緒に考え、一緒に悩む。そんなスタンスは今も変わらない。

CODEの理念である「困った時はお互い様」、「支え合い、学び合い」、「最後のひとりまで」をどれだけ実践できるかが被災地の現場でいつも問われている。時に人は、自分の事だけしか見えなくなり、一方的に上から目線になり、謙虚に学ぼうとしなくなる。そして多数派(体制)に流されていく。これらの言葉は、NGOの理念であると同時にNGOの実践者への戒めであるようにも思う。これからも常に自問自答しながら精進していかなくてはならない。

そして自分が被災地、被災者、そしてCODEに育てられたように、今度は僕らが次の世代を育てていかなくてはならない。今後もCODEという場が、若者が集い、K OBEから世界を想う、未来を語る場になる事を願っている。

CODE海外災害援助市民センター事務局長 吉椿雅道

プロフィール

学生時代より武術、東洋医学を学ぶ。20代より先住民支援のNGOなどの様々なボランティアに参加する。阪神淡路大震災で足湯ボランティアを始める。4年間のアジア遊学後、2004年より被災地NGO協働センター、CODEのスタッフとして国内外の被災地支援にかかわる。2011年よりCODE事務局次長を担う。

特集 CODE10周年記念シンポジウム

CODEは2013年2月2日に10周年記念シンポジウム「寄り添いからつながりへ」を行いました。第1部は芹田代表の基調講演、第2部はパネルディスカッション、第3部は若者ポスターセッションを開催しました。ルトフ・ラフマンさん(アフガンニスタン)、彭廷国さん(中国・四川省)、ジャン・クロード・レフェルブさん(ハイチ)の3名がパネリストとして来日しました。その時の様子をふり返っていきます。



シンポジウム「寄り添いからつながりへ」

前夜に降っていた雨も上がり、イベント日和となりました。この日シンポジウムには121名、懇親会には63名の方に来ていただきました。

芹田代表の挨拶の後、兵庫県副知事吉本知之様からCODE10周年のお祝いのお言葉をいただきました。

基調講演

第1部では芹田代表が「寄り添いからつながりへ」をテーマにNGOや国際支援の在り方、そして「最後の一人まで」という言葉の意味について基調講演を行いました。講演の中で、「最後の一人まで」という言葉やNGOとしての役割というものが強調されていました。現在の民主主義における多数決では100人いれば、51人に対する49人、99人に対する1人というように、最後の一人は必ず切り捨てられることとなります。だからこそ、私たちは最後の一人までこだわります。」とNGOの役割を示しました。



▲第1部基調講演のようす

パネルディスカッション

第2部ではゲストの3人によるパネルディスカッションが行われました。「支援と受援のあり方」をテーマに3つの被災地の現状、CODEの支援、CODEのこれまでの救援活動への意見が述べられました。

ラフマンさんは、アフガニスタンの現状の悲惨さと未来へ希望を持つことを強調していました。アフガニスタンは災害頻発地域かつ紛争地域でもあります。紛争で故郷を離れた人々にとって、

CODEの支援はもとの村に帰る希望となったと言っていました。かつてCODEが建設した女性学校の出身者から村で初めての大学生も出ました。また、ラフマンさんは災害がもたらす結果を「Destruction(破壊)」という言葉を用いて表現し、「アフガニスタンの現状とその苦しみを伝えることが難しい。」と言っています。



▲第2部 パネルディスカッションのようす

彭さんは光明村で行われているCODEの支援が、その後どのように活用されているかというお話が中心となりました。村からは若者が外へと出稼ぎに行き、高齢者と子どもと女性が村に残っています。老年活動センターを村人が集まる場以外にも、地域雇用と経済力を高めるツーリズムの呼び水にしようとする住民自らが話し合い、新たなプロジェクトを考えています。CODEがつくった場が被災地の人々自身の自立の力によって、CODEが考える以上の成果となっています。



▲パネリストの彭廷国さん(四川)

レフェルブさんは、ハイチにおける農業の重要性を強調していました。主要な産業が農業しかないハイチでは森林伐採に伴い土壌の劣化が始まり農業離れ、食糧不足が深刻化しているそうです。それに歯止めをかける為にも若い人材を育成する場が必要で、そのために農業技術学校を建設するのだと言いました。支援とはお金やものをあげたりすることではなく、その国の人々が自立して生きていける力をどのようにつくっていかれるかということです。レフェルブさんは「日本から農業の先生を招くことができれば。」と言っています。

懇親会・若者ポスターセッション

第3部・懇親会では若者ポスターセッション「海外災害支援 次世代からの提案」が行われました。9チームがエントリーし、「〇〇で災害が起こったら、復興に向けてどのような復興プロジェクトを行うか？」をテーマに災害復興プロジェクトを考えました。各チームプレゼンテーション後にコメンテーターからアドバイスを頂きました。

参加者による投票の結果最優秀賞に選ばれたのは、インドネシアでの火山噴火を想定し、モスクでの内職作業や浄水施設の設置、防災教育を提案した「KOBE足湯隊」チームの「火山とともに生きてゆく」でした。そして副賞として、チームの後藤早由里さん(当時神戸大学4年生)はCODEのプロジェクト地への訪問が約束され、3月15日～19日に四川省光明村や新北川県などを訪れました。



▲最優秀賞のチーム「KOBE足湯隊」



東日本大震災被災地訪問

10周年シンポジウム後、2月3日～6日の4日間に渡り、ゲストの3名と共に東日本大震災被災地である宮城県、岩手県を訪問しました。

「元の場所に住みたい人もいる」

2月3日から6日まで、ゲスト3名を含む9名で宮城県、岩手県の東日本大震災被災地を訪れました。仙台空港に到着した一行は、東北地方で最も小さな町である七ヶ浜町を訪れました。仮設住宅では七ヶ浜の支援を続けているレスキューストックヤードの石井さんのお話を聞きました。七ヶ浜は街の町の30%が浸水し、高台移転が余儀なくされています。しかしラフマンさんは「そこに住みたい人もいる、逃げられる場所を用意すれば」ということを言っていました。紛争によって故郷を追われ、ようやく戻ることができたアフガニスタンの方だからこそ、故郷に戻るの意味を考えたのでしょうか。ゲストの方々は七ヶ浜町の被災状況や被災者の方々の不安を聞き、被災者の生活についてとても興味を持ったようでした。その後私たちは仮設住宅や建設途中の建設中の防潮堤を訪れ、寒さに耐える避難生活や海が隠れてしまいそうな防潮堤の大きさを実感しました。

被災者を繋ぐ

2月4日に訪れたのが宮城県最北の町である気仙沼市です。気仙沼市への支援を続けているシャンティ国際ボランティア会(SVA)の白鳥さん、笠原さん、気仙沼復興協会の塚本さんに気仙沼の被災地を案内していただきました。流された線路や陥没した漁港など津波の爪痕が色濃く残っていました。SVA気仙沼事務所では津波発生当時の記録映像とSVAの活動を紹介していただきました。先程まで私たちが見ていた場所が波に飲まれ、人が声を上げながら逃げていく映像は津波の圧倒的な力を実感させられ、ゲストの方々は食い入るように映像を見ていました。最後に被災地グッズをいただいたお三方は笑顔を見せて喜んでいました。

その後気仙沼市内にある面瀬(おもせ)仮設住宅を訪れ、そこで被災者支援に携る阪神高齢者・障害者支援ネットワークの藤田さんのお話を聞きました。藤田さんたちは、24時間交代制で常に誰かが面瀬の集会所に駐在するようにしています。また、なかなか外に出てこない方や病院へ行かない方への訪問も行っています。こ

の活動では、面瀬に避難している方が独りにならないようにすることも大切なことです。身体的にも精神的にも被災者を支える藤田さんたちの活動から、見えないソフト面の支援の重要性を改めて気付かされました。集会所の中で活動する仮設住宅のお母さんグループから聞こえてきた笑い声は、繋がり results の一つと言えます。

痛みの共有

2月5日には被災地NGO協働センターの増島さん、頼政さんの案内で釜石市の中之島仮設住宅を訪れました。そこで自治会長の佐々木さんご夫妻のお話を聞きました。佐々木さんご夫妻は自分たちの町の復興のために日々奔走しています。お二人は海外の被災地についてたいへん興味を持たれていて、3カ国の被災者が互いの国の被災状況や復興について語り合うことが出来ました。



▲佐々木さんご夫妻と

次に訪れた岩手県大槌市吉里吉里(きりきり)第2仮設住宅では、ゲストが被災者のお母さんたちに教えてもらいながら「まけないぞう」作りを体験しました。大きな手で器用に針を使っていて、談笑しながら楽しそうにまけないぞうを作っていました。



▲まけないぞうを作るラフマンさん

その後、仮設住宅のある女性の家へとお邪魔しました。その女性は手づくりの漬

物などで私たちをもてなしてくれました。帰り際に彭さんが「身体に気をつけてください。」と言うと、その女性は涙を流しました。この光景を見ていたラフマンさんは自分達が訪ねてきたこと自体に大きな意味があり、東日本の被災者にとって一助となることを知ったと言っていました。国境を越えた「痛みの共有」を垣間見ました。

この日最後に訪れたのが、釜石市の高台にある駒木山不動寺というお寺です。このお寺の尼僧である森脇さんにお寺の歴史や東日本大震災の経験を語って頂きました。ハイチのレフェルブさんは仏教についても興味を持ち、宗教の面からも日本文化を学んでいました。

日本の文化に触れる

6日はかやぶき屋根の南部曲り家である千葉家や世界遺産である中尊寺を訪れました。伝統木造建築は災害に強く、その地域の文化の象徴でもあります。CODEは四川やジャワでもその地域の伝統建築の支援を行いました。雪合戦も楽しみ、存分に日本文化を堪能してもらいました。世界遺産である中尊寺でも、レフェルブさんは仏教や文化財にとっても関心が高く、スタッフや通訳は質問攻めにあっていました。



▲今回の日本訪問を振り返るレフェルブさん
ゲスト来日から帰国までの9日間を通じて私たちは様々なことを学びました。3人のゲストの方たちはいずれも吸収する姿勢をととても強く感じます。日本独自の食事マナーなどどんなことでも積極的に挑戦し、その良い所を祖国に持ちかえるという意志が垣間見えます。また、日本や他の国から多くのことを学ぼうとする姿勢とともに、祖国の現状をもっと知ってもらおうと発信する姿勢も数多く見られました。

クローズアップ 「大学生、被災地へ行く」

2月2日に行われた若者ポスターセッションは「KOBES足湯隊」が最優秀賞に選ばれました。副賞としてCODEから神戸大学4回生(当時)の後藤早由里さんに四川大地震(2008)の被災地に行っていただきました。後藤さんのレポートを紹介いたします。

3月15日 新北川県

北川県は、四川大地震によって大きな被害を受け、人口3万人の内の2万人が亡くなり、さらに地震の影響で土砂崩れや土石流の被害が重なり、政府より復興は困難と判断を受け、別の場所に新しく北川県をすることになったと聞いた。今日は、その新しく作られた“新北川県”を見に行った。



▲新北川県の様子

“新北川県”は、とてつもなく大きかった。元々、菜の花畑だったところに、将来は7万人が住むと計画され作られた町ということだった。町の中には、マンション、お店、学校、スタジアム、博物館などが、広大な土地に一つ一つどっしりがっしりと建っていた。しかし、その建物の存在感に比べて人の気配はあまり感じられなかった。商店の集まっている辺りに行くと、それなりに人が歩いてしたが、少しめかし込んだ格好の人たちが多く、どうやら観光に来ている人のようだった。

これだけ大きな建物がいくつも発災から数年で建ったということには驚いた。日本とは違い、土地はすべて政府の持ち物であり、とにかく政府の力がとっても強力なことでこのようなスピードで成し遂げられたということだった。被災して家がなくなった人たちにっては、すぐに住む家を得ることができるのはとても安心できることだと思うので、その点でスピーディーなこととは大事なことだと思った。一方で、元々この場所で菜の花を育てて生計を

立てていた人は今どんな思いでマンションに暮らしているのだろうか？北川県で被災した人たちは、この場所で以前のような仕事ができているのだろうか？マンションから商店まで歩いたら遠いだろうなあ。いろいろ大きすぎやしないだろうか？と思うことはいろいろあった。

東日本大震災では、日本の制度や行政の仕組みなどもあって、なかなか将来の住居が決まらずにいる人がたくさんいる。その人たちのことを思うと、早く住居が決まることはとても大事なことだと思う。でも、今回この“新北川県”を見て、早ければいいというものでもないように思った。その場所でこれから生きていく人たちが、どう生きていきたいと思っているのか、どんな生活をしていきたいのかを大事に考えていかなければ、その場所に生きていく人たちの生活が、気持ちが、続かないような気がした。

3月15日 光明村

光明村に着いて、書記さんのお宅でお医者さんと書記さんと村長さんと昼食をごちそうになった。そこまでの道沿いには、すっかりきれいな白壁の新築が並んでいて、すべての家が被害を受けたということが、今の光明村からは想像がつかない程だった。

村の人たちは、初めてやってきた中国語のわからない私を、にこにこしながら受け入れてくれた。こんな風を受け入れてくれるのは、吉椿さんや光明村で活動したボランティアと村の人たちが築いてきた信頼関係のおすそ分けをいただいたような気がした。

昼食後、光明村の老年活動センターを見に行った。木造の伝統的な作りの建物は、かっこよくて、村の雰囲気馴染んでいた。今日はたまたま、いつもレストランをしているお母さんがPTAの会議のようなものに行っていてセンターが開いていなかったため、あま

り人がいなかった。普段はどんな様子なんだろう、ここにきている高齢者の方たちはこのことをどう思っているのだろうと思い、また日曜日に行ったときに開いていたらいいなと思った。

老年活動センターでは村長さんや書記さんの話を聞いた。今後老年活動センターをより大きくして、イベントをしたり、釣りやほかにもいろいろと事業を広げていきたいというようなことを話していた。



▲満開の菜の花と老年活動センター

老年活動センターを見た後、村の1人のお母さんに連れられて、そのお母さんのお宅にお邪魔した。そのお母さんは、老年活動センターをこれ以上大きくする必要はないと話していた。しかし、それは村長さんや書記さんには面と向かっては言わない。吉椿さんによれば、中国では政府の力がとても強く、村のことも村長や書記の意見でいろいろなことが決まるということが普通なこと、それに対して村人が意見する場などはほぼ存在しないという中国ならではの事情があるようだ。

外から支援に入る私たちは、村の人たちの意見も聞いていった方がいいのではないかと思うかもしれないけれど、その意見を押し付けたら、この村の人間関係のバランスが崩れてしまうかもしれない。それはとても大変なことだと思う。でも、村のみんなの意見が汲み取られていくこともとても大事だと思う。村長さんや書記さんと村の人たちの意見、どちらもじっくり聞いて、

バランスを取りながら調整することが大事だと思うが、それはとても基準があいまいなもので、慎重に進めないといけないことだと思った。

外から支援に入って、老年活動センターを建てても、それで終わりではなく、老年活動センターが村の人たちに本当の意味で馴染んでいくように、見守っていくことも大切だと思った。

3月16日 ブン川県

今日は、震源のあるブン川県の復興された街を見に行った。

そこでは、地震によって倒壊した中学校がそのままの形で遺跡として保存され、その周りには商店が立ち並び、地震博物館も建てられ、観光地のようにになっていた。観光で訪れている人は、その多くがガイドに連れられて見てまわっていた。

その街の中の住宅地を2か所見てまわった。

1カ所目は3階建ての一軒家で、ほとんどの家が1階のスペースを使って商店をしていた。その中のヤクの角を加工した小物を売っている1人のおばさんに話を聞いた。おばさんは、元々は、地震によって被害を受けた山間部に住んでいて、今と同様の商店を開いていたという。日本の復興住宅でもお店を持つ人はいるが、その数は少ないと思う。このように、復興住宅の住居として得た部分の一部をお店にするという発想はすごく新鮮で、中国人の力強さを感じた。日本では何かしらの制度があって住居部分をお店にするというのはいけないのかもしれないが、元々や

っていた仕事ができるのは、その人の生活習慣が取り戻しやすく、生活する中で大きな力になると思った。

2カ所目は、土砂によって被害を受けた村を再建したところで、2階建ての住居が建ちならんでいた。一軒ごとに少し大きめの花壇のような場所が設けられていて、そこにはどの家も所狭しと菜の花や白菜やネギなどいろいろな野菜が植えられ育てられていた。

元々、その村に住んでいた方は農作物を育てていたそうで、住宅にも畑のできるスペースが設けられたようだった。一軒ごとに小さくても畑仕事のできるスペースがあることで、そこでできた野菜を家で食べることができ、さらに、いきがいが保てるのではないかと思った。



▲野菜がたくさん植えられた復興住宅

2カ所の復興住宅を見て、そこに住む人たちがどんな暮らしをしてきたのかを踏まえて住宅を建てることで、そこに住む人たちが復興住宅での生活に慣れやすく、生活する力につながると思った。

3月17日 地震遺跡

今日は北川県の地震遺跡の見学に行った。

バスを降りて見えた光景は、衝撃的だった。地震災害後の街をそのまま保存していると聞いてはいたが、実際にすべての建物が傾き、崩れ、潰れている。その空間からは、痛みや苦しみの声が聞こえてくるような気がして、心の中ではずっと手を合わせていた。

四川大地震の行方不明者は、1万7923人いると聞いていた。この建物の下に今もおられる方がいるかもしれないと思い、その方々の存在を感じながら見学させていただいた。

このように地震遺跡として、被災した町全体を残し見学できるようにするという点については、貴重なことだと思う人もいれば、絶対よくないと思う人もいると思うし、どちらの気持ちもあるという人もいると思う。しかしこの町は保存されている。この街を見学して、私は、この地震遺跡を100年後に見ても同じように衝撃を受け、手を合わせると思った。保存されるということは、この地震の記憶を持たない人が見ても多くのことを感じ、学ぶことができると思う。この場所で被害にあった方はどんな思いだったのか、自然の力がどれだけ大きなものなのか、建物はどうして崩れ倒れ潰れているか、それぞれ考えることは違っても、きっと何かを感じると考えた。それぞれが見学してそれで終わるのではなく、それぞれが感じたこと考えたことが共有され、今後に活かされていくことが重要なことだと思った。

(後藤早由里)

速報・四川省雅安地震

雅安地震の概要

発生日時：2013年4月20日8時02分
(現地時間)

規模：M7.0 深さ：13km

被害状況：死者193人

行方不明25人

負傷者1万2211人

被災者約199万人

(23日6時時点)

四川省雅安市でまた大規模な地震が発生しました。今回の震源は、2008年の四川大地震を引き起こした龍門山断層(全長約450km)の南端にあたります。被害の甚大な雅安市蘆山県や宝興県は、2008年の時の被災地ですが、被害の少なかった家は補強もされずに、5年後のこの地震で大きな被害を受けてしまいました。また、2008年に比べると今回の地震の被害は局所的ですが、急峻な山間部の1本道が道路崩落や土砂崩れにより寸断されていて救援に困難を極めています。

CODEは、発生直後から現地と連絡を取りながら情報発信を続けています。2008年の四川大地震直後から支援を続けている北川県光明村でもかなり揺れたそうですが、老年活動センターはまったく被害はありませんでした。中国のボランティアやNGOの仲間たちも被災地に向かっています。

今後も現地と連絡を取りながらCODE独自の情報発信を続けていきます。(吉椿雅道)

災害救援プロジェクト 活動報告

ハイチ (since 2010)

○農業技術学校支援の背景

2010年1月12日の大震災で、22万人以上の方が犠牲になりました。CODEは直後から支援を続けており、現在は現地NGO「GEDDH」による農業技術学校の校舎建設を支援しています。

ハイチは西半球で最も貧しい国と呼ばれ、約1000万人が暮らしています。また、ハイチは農業国であり、国民の多くが米やコーヒ栽培などの農業に携っています。しかし、近年アメリカなどの諸外国から安価な農産物が輸入されることで農家の生活が立ち行かなくなり、農業をやめてしまう人が増えています。またハイチはハリケーンの頻発地域でもあり、大きな被害をもたらしています。さらに長年、農地を開拓するために木々が伐採されたことによって山は保水力を失い、ハリケーン被害を深刻なものとしています。そこでこれらの問題を解決する手段としてGEDDHは植林や農業技術を学び、技術を将来農業を担う若者に伝えるために農業技術学校を設立しようとした。ところが2010年にハイチ地震が発生した事により計画の見通しが立たなくなってしまいました。

農業技術の普及はハイチの人々の生活基盤を支えるだけでなく、森林保全によってハリケーンの被害を減らすことができます。住民の自立をめざすCODEはこれを支援することを決めました。GEDDHからは既に設計図が送られており、今後は運営なども含めたソフト面の調整を重ねていく予定です。現在、シスター須藤の呼び掛けにより、GEDDHに加え専門家を含めた委員会が設立され、建設や運営の準備を行っています。この間もGEDDHは野菜の栽培などに取り組んでいます。



▲シスター須藤とGEDDHのメンバー

○ハイチの農業事情

あるハイチの人がこんなことを言っていました。「ハイチではハイチ米を食べることができない。」この一言は実に的確にハイチの現状をとらえています。ハイチは1980年代までは食糧自給率80%、米の自給率は100%を誇っていました。それが現在では食糧自給率45%、米の自給率は30%未満にまで低下してしまいました。では、なぜこのような事態に陥ってしまったのでしょうか。

ハイチは1986年までデュバリエ大統領による独裁政権下に置かれていました。しかし1987年に民主化が始まると、独裁政権下では保護されてきたハイチ農業が国際競争にさらされることとなりました。さらに国際通貨基金(IMF)が1979年以降ラテンアメリカ諸国に行っていた「構造調整政策」をハイチでも受けることとなりました。そして貿易の自由化による関税の大幅引き下げが行われ、アメリカをはじめとする諸外国から大量の安い食料品がハイチ国内に流入することになりました。これまで35%あったコメの関税は3%にまで引き下げられました。その結果、国内の農業は大きな打撃を受けました。政府の援助もなく、生産技術に乏しく、質と量の両面で輸入米に敵わない地方の農家は生活もままならない事態となり、稲作を止めざるを得なくなりました。貧富の差が拡大し、稲作をはじめとする農業も衰退の一途をたどるなかで2010年にハイチ地震は起きました。「ハイチではハイチ米を食べることができない。」この言葉はハイチ農家と外国資本に脅かされるハイチの国内産業の現状を表しています。

(上野智彦)

アフガニスタン (since 2002)

2003年にミールバチャコットのぶどう農家288世帯を対象に始まったぶどう基金は、2013年4月現在531世帯の農家を支援するに至っています。このぶどう基金の運営はコーポラティブシューラ(ぶどう協同組合)が行っています。2007年~2009年の3年間で、JICA草の根技術協力事業(地域提案型)による年1回の農業研修を兵庫県佐用町や山梨県で行い、現在ミールバチャコットのぶどう農家は研修の成果を受けて、有機栽培を始めた農家も少なくありません。これから如何にして有機農家を増やしていくかが課題となっています。

2010年ころからパキスタンへの輸出が規制され、生産量が上がったにもかかわらず販路が確保できないという状況にあります。アフガニスタン国内はぶどう農家が多い事もありあまり販路として伸び代がなく、市場を新たに開拓することが大きな課題となりました。また現在、ミールバチャコットの有機ぶどうのフェアトレードを目指して、アフガニスタン、日本国内の双方と調整を重ねています。



▲ぶどう栽培の様子

(上野智彦)

青海省 (since 2010)

青海省地震(2010年4月14日)から3年が経ちました。標高3700mのチベット高原の被災地は、1年のうち8か月が長い冬に閉ざされていましたが、最近ようやく復興事業が再開されたようです。

CODEはメインプロジェクトである「ヤク銀行」の最終調整を現地のヤク銀行委員会と行っています。カウンターパートであるインドネシア人、イアニさんが震災後から活動してきたラブ村でこのプロジェクトを進めていきます。現在、イアニさんが現地に入り、委員会のメンバーと具体的な運営方法などの協議を行っています。その後、ヤクの購入、住民への提供などの具体的な実施を行っています。詳細は次号にて。

(吉椿雅道)



▲ヤク委員会のメンバーと

四川省 (since 2008)

老年活動センターはすでに村の高齢者の娯楽施設として、また、村の祭りやイベントなどでも活用しています。一方で、村の有志の投資によってアグリツーリズムとしての「農家楽」の運営も始まり、センターの横に厨房を作り、農家レストラン、茶館として営業しています。今後の計画としては、センター前の道路沿いに政府の障がい者協会の資金で蓮花の池と釣堀を作り、外部から観光客を呼び込む予定です。いずれ観光客が民泊できるようにも計画しています。

今後CODEは、センターの運営に対する住民参加や農家楽の広報などの智恵の支援を継続し、道の駅(野菜販売所)を設けることで光明村の野菜を観光客に買ってもらうよう工夫する予定です。また、農家楽の専門家を村に呼び、住民参加や運営などの研修を村民と行うことで住民の参加意識の向上を図るつもりです。

(吉椿雅道)



▲光明村の蓮花の池の案内板

イベント情報

CODE寺子屋セミナー 若者編

「いま、若者へ伝える、17年間の救援思想」

CODE10周年を機に、次世代を担う若者と一緒にKOBEの市民の活動から学ぶ講座「いま、若者へ伝える、17年間の救援思想」を2012年4月から月1回ペースで行っています。設立から2012年度までの事務局長として救援プロジェクトをコーディネートしてきた村井雅清が、各プロジェクトにおける学びや人々との出会い、そこから得た救援思想をお話します。NGO、防災、国際協力などに興味がある若者の皆さん、お気軽にお越し下さい。

第8回 「パキスタン北東地震(05')、ジャワ島中部地震(06')」

日時: 5月12日(日)14:00~16:00

場所: CODE事務所



CODE寺子屋のようす

CODEの夕べ~楽しい食事と報告会~

6月15日(土)18:30よりCODEの夕べを開催します。CODEが進めている救援プロジェクトをスライドを交えながら報告します。食事を交えながらのアットホームな交流の場になればと考えています。ぜひ多くの方のご参加をお待ちしております!

準備の都合上、事前のご予約が必要となります。参加をご希望の方はお電話、メール、FAXでCODE事務局までご連絡下さい。

日時: 6月15日(土)18:30~21:00

場所: 兵庫県民会館 7階会議室「鶴」

(神戸市中央区下山手通4丁目16-3)

フェイスブックとツイッターをやっています

CODE事務局では広報活動の一環としてフェイスブックとツイッターを利用しています。世界の災害情報やイベントや救援活動の振り返り、ニュースなどを配信しています。ぜひご一読ください。

報告会・イベントを開催してみませんか

CODEでは報告会やイベントの開催を希望する方を募集しています。「こんなお話しが聞きたい。」「こんな講師がいます。」などのご提案がございましたら、ぜひお待ちしております。

役員・スタッフ活動記録 2012/12/1～3/31

- 12/1 第1回若者ポスターセッション
12/2 青海省地震報告会 (吉椿)
12/4 JICAアンデス地域災害医療マネジメントコース
講演 (村井理事)
12/9 コープこうべで講演 (村井理事)
ポスターセッション東北版 (吉椿)
12/13 コープこうべ第4地区「平和の集い」で講演 (吉椿)
12/14 平成24年度21世紀文明研究セミナーで講演 (吉椿)
12/17 CODE理事会
12/19 NGO・JICA協議会in東京 (村井理事)
12/22 関西NGO協議会理事会 (村井理事)
1/16 龍谷大学で講義 (村井理事)
神戸市立楠高校で講義 (吉椿)
1/18 国際防災協力研究会に出席 (吉椿)
神戸市立楠高校で講義 (吉椿)
1/20 CODE寺子屋セミナー・ハイチ報告会
(村井理事・岡本)
第2回ポスターセッション
1/24 神戸市立楠高校で講義 (吉椿)
1/25 国際防災協力研究会に出席 (村井理事)
1/30～31 シンポジウムゲスト来日
2/2 CODE法人10周年記念シンポジウム
2/3～6 シンポジウムゲストの東北オプションツアー
(吉椿・岡本・上野が同行)
2/6～7 シンポジウムゲスト帰国
2/8 関西NGO協議会理事会 (村井理事)
2/9 ひょうご防災リーダー研修会で講義 (村井理事)
2/18 NGO・JICAコーディネーター会議 (村井理事)
CODE理事会
3/12 CODE若者寺子屋特別編
3/14～19 第22次四川派遣
(ポスターセッション最優秀賞受賞者同行)
3/21 NGO・JICA協議会in東京 (村井理事)

会員募集・ご寄付のお願い

いつもCODEの活動にご支援・ご協力いただきありがとうございます。CODEの復興支援活動は、発災からの2～3年が主な実施期となります。その間、プロジェクト費だけでなく、現地のフォロー広報・報告のために事務局での活動を維持する必要がありますぜひ会員として継続的にご協力いただけますようお願いいたします。

これまで通りの会費やご寄付はもちろんのこと、皆様の地元の報告会や講演会の企画、開催という形でも、ぜひCODEの活動にご参加ください。新たにスタートするCODE・AIDについては別紙の方をご覧ください。

プロジェクト費以外の事務・管理費に役立てさせていただく「般寄付(カンパ)」もお願いしております。既に今年も会員となっ下さった皆様、寄付を下された皆様には重ねてのご案内となり申し訳ございません。誠にありがとうございます。引き続きどうぞよろしくお願い致します。

☆CODEに対するご意見、アドバイスを何なりとお聞かせ下さい。

会員・寄付者ご芳名(順不同・敬称略)

2012/8/1～2013/3/31

◆一般寄付(災害救援への寄付は除く)

朝比奈幸、石田和子、井上由紀子、鶴飼愛子、梅津純子、加藤雄司、神戸YMCA、スズキタツロウ、タナカアヤコ、田辺エツ、谷野順子、土屋芳久、ナンバミドリ、橋本成年、めふコープ委員会、本岡那智子、(有)トレテス、柚原里香、椋田湯子、安部美鈴、菊田歌雄、後藤秀夫、黒田達雄、今井鎮雄、小牧正子、小林芙佐子、水嶋勉、齊藤茂樹、石橋有紀、赤田義久、大江良一、大槻輝美、旦保立子、塚本健三、田中、白水土郎、平田康、本岡那智子

◆会 員

《正会員》

【個人/NPO/NGO】飛田雄一、明石和成、鶴飼卓、JIPPO、野崎隆一、草地とし子、村上忠孝、鐘森雅之、山崎達枝、松本誠、村井雅清

【団体】神戸YMCA、コープこうべ

《賛助会員》

【個人】

山崎清、兵藤晴喜、木下洋子、小さな友の会 阪井健二、桂光子、亘佐和子、田村快光、月村雅一、中村大蔵、中村覚 佳代子、松岡尚武、古木京子、阿部好一、江口節、南裕子、向井地明、高嶋芳子、平田康、植松好子、新雅彦、大槻輝美、日高理恵、神田心一、高田秀峰、石川ちすみ、黒田達雄建築研究所、羽島新菜、山本あい子、服部正、前畑美智子、小林孝信、白水土郎、山本治子、原ちえこ、伊藤治郎、紅谷昇平、土本基子、安藤尚一、山田光、岩崎信彦、岡田雅幸、難波緑

【団体】(村井新聞店、DT&COMPANY関本)

日本木造住宅耐震補強事業者協同組合

次号予告

- ・2013年度CODE基本方針
- ・特集 ハイチ地震救援プロジェクト(予定)
- ・救援プロジェクト活動報告
- ・四川省雅安地震について(予定)

